

イザヤ書40－42章17節 「慰められるイスラエル」

1A 力ある神の到来 40

1B 呼ばれる声 1－11

2B 比類なき方 12－26

2B 新たな力 27－31

2A 国々に対する呼びかけ 41

1B 恐れ、偶像を造る者たち 1－7

2B 僕イスラエル 8－20

3B 後に起ころうとする事 21－29

3A 主の喜ばれる僕 42

1B 国々への公義 1－9

2B 敵の滅ぼし 10－17

本文

イザヤ書 40 章からです。40 章から、イザヤの預言が大きく変わります。その主題は、40 章 1 節「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」であります。神に選ばれた民は、慰めが必要です。神の民は疲れ、恐れ、またそのために主が命じておられることに応答していません。主は慰めをもって私たちを力づけ、そして与えられた使命を果たすように導かれます。使徒パウロは、「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。(2コリント 1:4)」と言いました。イエス様が聖霊について、「父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。(ヨハネ 14:16)」と約束してくださいました。助け主は、助けるためにそばに呼ばれた者、という意味です。ぜひ、私たちもイザヤ書の後半部分を読みながら、大いに慰められていきましょう。

前回の学びの最後の部分を見てください。39 章 6 節ですが、「見よ。あなたの家にある物、あなたの先祖たちが今日まで、たくわえてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日が来ている。何一つ残されまい、と主は仰せられます。」とあります。バビロン捕囚は、三段階ありました。紀元前 605 年、597 年、そして神殿の破壊される 586 年です。イザヤは、その預言の後期にこれらバビロン捕囚についての預言は行ないませんでした。バビロン捕囚そのものについては、次に私たちが学ぶエレミヤ書に克明に記されています。イザヤはその捕囚の民が、70 年後にエルサレムに帰還するその約束を語り始めます。エルサレムを滅ぼしたバビロンが、紀元 539 年にメディアとペルシヤの連合軍によって滅びます。そしてペルシヤの王クロスが、ユダの民をエルサレムに戻れ、そして神殿を建てなさいという布告を出します。そして、ユダの民が帰還することができる、その慰めを、実際にそのことが起こる 150 年ぐらい前に語り始めます。

1A 力ある神の到来 40

1B 呼ばれる声 1-11

40:1 「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。40:2 「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」

慰めよ、慰めよ、と一度ならず、二度声をかけておられます。そして「優しく」語りかけよ、とありますが、これは「心に」と訳すこともできる言葉です。頭ごなしではなく、私たちの心に沁み込んでいくように主が語りかけてくださいます。どのようにして慰められるのか？「労苦が終わる」とありますが、「戦いが終わる」と訳しても良い言葉です。バビロンの中に生きている、その圧迫の戦いが終わるということです。その捕囚は、彼らが主に逆らっていたから、主がそのなるように仕向けたものでした。しかし今、主がその罪を豊かに赦してくださいます。それで、「二倍のもの」という言葉でその豊かさを表現しています。罪によって失ったものを補うだけでなく、それ以上の赦しを与える、つまり恵みが溢れ流れるようにしてくださるのです。

午前礼拝でお話ししました、イザヤはバビロン捕囚七十年後の帰還のことを踏まえながら、イスラエルの救い主、キリストが来られることを預言していました。イエス様がお生まれになって、宮に幼子を捧げるためにヨセフとマリヤはエルサレムに来ましたが、幼子を見たシメオンは、「イスラエルの慰められることを待っていた(ルカ 2:25)」とあります。そして、「私の目があなたの御救いを見たからです。(30 節)」と言っています。イエスの御名にあって、私たちが悩み苦しんでいた、心で戦っていた罪の縄目から、その罪の豊かな赦しによって解放されるのです。

40:3 荒野に呼ばれる者の声がある。「主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。40:4 すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。40:5 このようにして、主の栄光が現わされると、すべての者が共にこれを見る。主の口が語られたからだ。」

その慰めを主が来られる前に、その備えをしなければいけないという呼びかけの声があります。それは「荒野」から来ます。それは、神なしで生きていた、命のない人間の世界を象徴しています。しかし、その荒野において、大路を整えよという声をかけます。聖書時代の大路は、凸凹になっている道を凹んでいる部分は埋めて、盛り上がっているところは平らにして、何とか通れるように整えていました。特に、王が通る時はその行列のために前もって、「王の道を整えなさい」と前もって呼びかける者がいます。これが霊的にもそうなのだ、ということをお話しています。王なる主の栄光が現れるために、谷は埋められ、山は低くされなければいけません。そうでなければ、その栄光を見えなくさせてしまいます。人間は、自分たちの思惑や野心、わがままや自己主張などで動いています。そのためにある者は高くなり、またある者は低くされています。しかし、主の前ではすべての人が同じところに立ちます。全ての人が罪を犯し、全ての人が神の前に有罪であり、しかし全ての人が、罪の供え物となってくださったキリストを信じる信仰によって救われることができます。

そこで、新約聖書の福音書では、この荒野の声がバプテスマのヨハネの声であったことを確認しているのです。彼が悔い改めのバプテスマを説きました(マタイ 3:1-6)。罪の告白をして、自分のあり方を改める、そのバプテスマです。私たちは、自分が主を受け入れるのを妨げていた、その高ぶりを主によって取り除いていただき、へりくだってこの方の前に出ていきます。

40:6 「呼ばわれ。」と言う者の声がある。私は、「何と呼ぼわりましょう。」と答えた。「すべての人は草、その栄光は、みな野の花のようだ。40:7 主のいぶきがその上に吹くと、草は枯れ、花はしぼむ。まことに、民は草だ。40:8 草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことは永遠に立つ。」

主は、人間の営みが草のように、野の花のようにはかないことを言われています。ユダの民は、バビロンの中で人間の営みの中で押しつぶされていました。しかし、それらは主の御霊が働かれれば、瞬く間になくなります。もっと確かなのは、神の御言葉なのです。それは、永遠に立ちます。ですから私たちは、このように共に御言葉を読んでいます。永遠の堅く立つのですから(1ペテロ 1:19 参照)。

40:9 シオンに良い知らせを伝える者よ。高い山に登れ。エルサレムに良い知らせを伝える者よ。力の限り声をあげよ。声をあげよ。恐れるな。ユダの町々に言え。「見よ。あなたがたの神を。」40:10 見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。40:11 主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。

これは、主なる神がシオン、エルサレムに戻って来られる時、それを迎える人々、具体的には女性たちが上げている声であります。かつてダビデが戦いから戻ってきて、サウル王も戻ってきた時に、タンバリンを持って、「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。(1サムエル 18:7)」と言いましたが、そのような情景です。そして、バビロンに捕え移された者たちにエルサレムに帰還する報いを主なる神は与えてくださいます。周りの国々から圧迫されている彼らですが、力強い腕で治めてくださり、しかし彼ら自身は羊に対するように優しく導いてくださいます。

このことが新約聖書において、キリストにあって実現します。主が甦られ、天に昇られ、甦られた五十日後に聖霊が臨まれました。そしてエルサレムから、良き知らせ、罪の縄目からあなたがたを解放するのだというイエス・キリストの福音が宣べ伝えられたのです。信仰を持たないユダヤ人の間で彼らは恐れていましたが、「恐れるな」と主は励まされます。そして、「見よ。あなたがたの神を。」と呼びかけています。私たちの恐れは、人を見ることによって、その頑なさや反対を見ることによって来ます。それで意気消沈し、疲れします。しかし、目を主に向けます。

それから 10 節にある主の力ある到来は、直接的にはイエス・キリストの再臨の姿です。報いを持ってくと書かれていますが、黙示録 22 章にイエス様が報いを携えて戻ってくると約束しておら

れます。しかし再臨の預言ではありますが、同じイエス様です、初めに来られた時も力強く、しかし良き牧者として優しく導いてくださいました。福音書に現れるキリストの御姿は、悪霊どもさえ制する権威を持っておられながら、なおのこと弱った人々にその力を優しく示される方であります。私たちに対しても同じです。

2B 比類なき方 12-26

そして、「見よ。あなたがたの神を。」という呼びかけに続いて、だれが神なのか？そのことをじっくりと語ってくださいます。

40:12 だれが、手のひらで水を量り、手の幅で天を押し量り、地のちりを枳に盛り、山をてんびんで量り、丘をはかりで量ったのか。40:13 だれが主の霊を押し量り、主の顧問として教えたのか。40:14 主はだれと相談して悟りを得られたのか。だれが公正の道筋を主に教えて、知識を授け、英知の道を知らせたのか。40:15 見よ。国々は、手おけの一しずく、はかりの上のごみのようにみなされる。見よ。主は島々を細かいちりのように取り上げる。40:16 レバノンも、たきぎにするには、足りない、その獣も、全焼のいけにえにするには、足りない。40:17 すべての国々も主の前では無いに等しく、主にとってはむなしく形もないものとみなされる。

神を神として見る時に起こることは、正しく物事を見ることができるということです。主は天地を創造された神です。地球にある大量の水も、この宇宙も、また陸地も、山々も丘も、私たちのすべての周りの環境は神ご自身の手によって造られました。そこにはとてつもない知恵があります。したがって我々人間のしてしまう問題について指摘しています。それは、主なる神に対して助言をすることです。「主よ、このようにしたら、もっとうまくいくと思います。」とあたかも自分のほうが主よりも賢いかのように、祈る時でさえ主の顧問になったかのように語ります。しかし、いかに滑稽な話であるかを、「主の霊を押し量り、主の顧問として教えたのか。」という言葉で言い表しています。

そして、彼らを貶めていたバビロンを始めとする国々ですが、それらが天秤の皿にある塵のようにみなされるということです。いかがでしょうか、私たちはほとんどがイエス様を信じていない国に住んでいます。自分の周りに、その職場にイエス様を信じている人はいないことのほうが多いですね。ですから、バビロンに住んでいたユダヤ人と同じような環境にいます。しばしば、日本語で何か緊張したり、恐れたりする時、「じゃがいもだと思いなさい。」という言葉を使って慰めますが、主は、「秤の上のごみ、細かい塵だと思いなさい。」と言われるのです。それらの力強い姿は主の前では無きに等しいのです。

そして、いけにえを捧げるのも、私たちはこのように小さな集まりの中で礼拝を捧げていると、あたかも小さな神のように見えますが、壮大なレバノンの杉の木も、獣も全く足りない、つまり全世界の豊かさをもってしても捧げ切ることのできない方であることを知る必要があります。

40:18 あなたがたは、神をだれになぞらえ、神をどんな似姿に似せようとするのか。40:19 鋳物

師は偶像を鑄て造り、金細工人はそれに金をかぶせ、銀の鎖を作る。40:20 貧しい者は、奉納物として、朽ちない木を選び、巧みな細工人を捜して、動かない偶像を据える。

聖書では、創世記で人間は驚くべきことに、「神のかたちに似せて造られた」ということが書いてあります。神に似た者として造られたのです。これは驚くべきことです。しかし、人間は自分の知恵や力、自分の能力などで生きることを望み、その延長として「神というのは、こうであるべきだ」というイメージを押し付けます。それが偶像であります。偶像というのは、これが神であるべきだと主張しながら、現実人は人がこしらえた創作物なのだということです。

40:21 あなたがたは知らないのか。聞かないのか。初めから、告げられなかったのか。地の基がどうして置かれたかを悟らなかったのか。40:22 主は地をおおう天蓋の上に住まわれる。地の住民はいなごのようだ。主は天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる。40:23 君主たちを無に帰し、地のさばきつかさをむなしのものにされる。40:24 彼らが、やっと植えられ、やっと蒔かれ、やっと地に根を張ろうとするとき、主はそれに風を吹きつけ、彼らは枯れる。暴風がそれを、わらのように散らす。40:25 「それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか。」と聖なる方は仰せられる。

主は、「あなたがたは知らないのか。聞かないのか。初めから、告げられなかったのか。」と問いかけておられます。なぜなら、ここにあるように天地を創造された方をユダヤ人こそが知っているはずなのに、周りの住民のことを恐れ、また周りの住民のように、偶像に引き寄せられてしまっていたからです。言い換えれば、神に自分の限界を押し付けていたと言ってよいでしょう。そこで主は、どれだけ偉大なのかを説明してくださっています。主はこの天と地をお住まいとされる大きな方です。そして君主や裁判官がいようと彼らは、主の御心によって引き抜かれます。

40:26 目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない。

主の偉大さを示すために、夜空に輝く星々に目を留めさせています。その一つ一つを、名をもって呼ばれているのです。先週のニュースで、太陽系に九つ目の惑星が見つかったというニュースが入りました。海王星の外側に太陽から 20 倍も離れたところで、地球の 10 倍程度の質量のある惑星が軌道を回っているとのこと。太陽の周りを一周するのに何と、1-2 万年かかるとのこと。けれども、人間にとっての新しい発見は神にとってはもう既に知っておられたこと。名前までを付けて、呼んでおられたのです。

2B 新たな力 27-31

そこで直接、「ヤコブよ。イスラエルよ。」と呼ばれて、彼らを励まし、慰めの言葉をかけられます。

40:27 ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。「私の道は主に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている。」と。40:28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。40:29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。40:30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。40:31 しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。

ヤコブまたイスラエルという呼び名は、そこにヤコブへの神の選びの愛が含まれています。そして、イスラエルへの契約が含まれています。ですから、この偉大な神が個人的に、自分の弱ところにもまで気にかけてくださり、助けてくださるということなのです。ぜひ午前礼拝の説教を聞いてください。

主は国々を塵としておられ、君主を無に帰すことをされる方ですが、その偉大な力を疲れてしまった私たちに精力として与えられる、ということでもあります。パウロもこのようにして、エペソの教会の人たちのために祈りました。「1:19-21 また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。」全能の力は、信じる者に働きます。信じる必要があります。神は全能の力を、イエスを死者から甦らせることによって示されました。私たちが、自分自身に対して疲れている、すなわち自分の罪や肉の弱さにつかれていますとしても、神は甦りの力で打ち勝つようにさせてくださいます。新たな働きを神はしてくださいます。これまでの延長ではないのです。

2A 国々に対する呼びかけ 41

1B 恐れ、偶像を造る者たち 1-7

41:1 島々よ。わたしの前で静まれ。諸国の民よ。新しい力を得よ。近寄って、今、語れ。われわれは、こぞって、さばきの座に近づこう。

主は、イスラエルの民に問いかけられた後に、ここにあるように、諸国また島々に対して問いかけられています。先ほど、「主は島々を細かいちりのように取り上げる。(40:15)」とありました。これは、主が地の果てまで、至るところにご自分の支配を伸ばされていることを示しています。イスラエルに対して語られたように、「静まって、新しい力を得よ。」と呼びかけられています。イスラエルだけでなく、諸国の民、地上に住むあらゆる人々に、ご自分が主なる神であることを示されようとしているのです。「さばきの座に近づこう。」というのは、「公正に判断する」ということです。「本当に人間の業によって、これから言うことが起こっているのか、よくよく考えてほしい。」ということなのです。

41:2 だれが、ひとりの者を東から起こし、彼の行く先々で勝利を収めさせるのか。彼の前に国々

を渡し、王たちを踏みにじらせ、その剣で彼らをちりのようにし、その弓でわらのように吹き払う。41:3 彼は彼らを追い、まだ歩いて行ったことのない道を安全に通って行く。41:4 だれが、これを成し遂げたのか。初めから代々の人々に呼びかけた者ではないか。わたし、主こそ初めであり、また終わりとともにある。わたしがそれだ。

この「ひとりの者を東から起こし」というのは、ペルシヤのクロス王です。ペルシヤは今のイランの古代王国であり、イスラエルから見れば東方であります。彼はアンシャンというメディア王国に従う小さな国の王子として生まれます。しかし、メディアに対して反乱を起こし、征服します。そしてトルコ西部にあるリディアを征服、それからエラムを征服。そして紀元前539年にバビロンを倒して、その後捕囚の民ユダヤ人を解放します。ペルシヤ帝国は、インドを東の境として、トルコやギリシヤの一部、それからエジプトの一部にまで及び、史上空前の大帝国になりました。このことを、主はイザヤを通して、クロスの子孫の生まれる90年ぐらい前に語っておられたのです。

ここで「だれが」、「だれが」という言葉が繰り返されています。考えてもみなかった動きをする王であり、人々は過去の知恵を用いることができません。前代未聞だからです。人々は何とかして、「これはこのはずである。」という方程式を見いだそうとします。しかし、良く考えてみるのです。実際にこの王が生まれる100年近く前にどうしてそんなことが起こると予測できるでしょうか？天地創造の神は、今、世界帝国の君主が現れることをイザヤを通して初めから告げさせて、それで自分が生きておられることを明らかにしておられます。

41:5 鳥々は見て恐れた。地の果ては震えながら近づいて来た。41:6 彼らは互いに助け合い、その兄弟に「強くあれ。」と言う。41:7 鋳物師は金細工人を力づけ、金槌で打つ者は、鉄床をたたく者に、はんだづけについて「それで良い。」と言い、釘で打ちつけて動かないようにする。

鳥々、地の果てにいる者たちが、この東からの王に対して、互いに助け合って連合して、対抗していこうと努力しています。それが、必死に偶像を細工していく者たちの姿によく表れています。主がなされているかもしれないという思い巡らしがなく、目の前にある事柄に対して近視眼的に動いています。「互いに助け合おう！」というのは、主を待ち望んでいないのであれば、悪いものです。バベルの塔やハルマゲドンの戦いは、一致して互いに助け合って神に反抗しているのですから！私たちは他の誰かがやっていることとは関係なく、主の前で自分がきちんと立ってられるか、そしてそこから聞こえてくる主の言葉に従えるかが問われています。

2B 僕イスラエル 8-20

41:8 しかし、わたしのしもべ、イスラエルよ。わたしが選んだヤコブ、わたしの友、アブラハムのすえよ。41:9 わたしは、あなたを地の果てから連れ出し、地のはるかな所からあなたを呼び出して言った。「あなたは、わたしのしもべ。わたしはあなたを選んで、捨てなかった。」

東から出てくる王に対して、他の国々とは異なる応答をしなさいと主は呼びかけられています。

彼らにとっては踏みつけてくるであろう王でしょうが、イスラエルにとっては自分たちを解放するところの王になります。同じペルシヤを見ているのですが、正反対のメッセージを受け取っているのです。主が、自分たちを見捨てていなかったことを知ります。

その違いはどこから出てくるか？とても大切な呼びかけの言葉が三つあります。一つは、「わたしのしもべ」であります。これから、「わたしのしもべ」という呼びかけは、メシヤご自身にも使われますが、これの意味しているのは、「主が命じられたことは、損得勘定抜きで信じて、受け入れる。そして実践する。」ということです。偶像礼拝の始まりは、損得勘定から始まります。「自分にとって益になるから、この言葉を受け入れる。」という逆になります。自分が主人であり、神が僕になるのです。偶像礼拝はそう言った意味で、自分を神とすること、自分礼拝なのです。しかし、まず、どんなことがあっても、主が言われたことだからという理由だけで、それを行なっていくということです。

これは私たちの人間性を否定するのでしょうか？自由意志や自由な思考を否定するのでしょうか？いいえ、その反対です。自由な思考を十二分に用いて、自分よりもはるかに知性のある創造主に自分の意志を従わせるのです。ですから、「しもべ」という呼び名は名誉ある、高い地位の呼び名です。この呼び名はアブラハムに対して使われました。モーセに対して使われました。ダビデに対して使われました。ヨブに対しても使われています。イザヤに対しても使われており、そして何よりも、私たちの主イエス・キリストに対して父なる神が、「わたしのしもべ」と呼ばれました(マタイ 12:18)。

そして、同じように「わたしが選んだヤコブ」という呼び名も大切です。そこには、神の恵みによる大いなる特権があります。アブラハムに対して与えられた、大きな国民となり、彼による世界の人々が祝福を受けるという使命であり、選ばれたということは光栄なことでもあります。そして、「選び」には、神の一方的な愛と憐れみがあります。ヤコブを神が選ばれたのは、ヤコブが良い行いをしたからではなく、何も行ないをしていない母の胎にいる時から、主はエサウではなくヤコブを選びました。それは、もっぱら神の憐れみによって彼を愛しておられたからです。そして、「わたしの友」とまで呼んでいます。これは主がアブラハムに使われた呼び名であり、友という言葉には、「他の人には言えない、隠していることであっても、あなたは友であるから包み隠さず明かす」という意味合いがあります。主が、ソドムとゴモラを滅ぼされる前にアブラハムにその意図をお語りになりました。

ですから、主が私たちを、ご自分のしもべ、ご自分の愛し選ばれた者、ご自分の友としてくださっているという真実を知ってください！このことを知っていれば、周囲の人々の同調圧力から解放されて、主の守りの御手の中で導かれることが可能なのです。

41:10 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。41:11 見よ。あなたに向かっているいきりたつ者はみな、恥を見、はずかしめを受け、あなたと争う者たちは、無いもののようにな

って滅びる。41:12 あなたと言ひ争いをする者を捜しても、あなたは見つけることはできず、あなたと戦う者たちは、全くなくなってしまふ。41:13 あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。

主の与えられる慰めは、40 章においては「疲れた魂」に対するものでした。世の圧迫によって、人々の反抗や抵抗によって、また自分自身の罪の問題があつて疲れてしまっている。その中で、「いやわたしは、すべてを知つて、すべてを動かし、支配している。このわたしに期待しなさい。わたしが動かしているのだから、信じて、待っていなさい。」と語られます。もう一つ、主の与えられる慰めは、「恐れるな」であります。捕囚の民ユダヤ人の心は、恐れに満ちていました。バビロンの前で頭を上げれば、何をされるか分からないという中で生きてきました。それゆえに、主の愛に駆り立てられて前進するのではなく、恐れて、尻込みしてしまっていたのです。

神の民にとって、大きな霊的課題は疲れの他に、恐れです。使徒パウロのことを思います。彼は、その福音の働きにおいて絶えず、反対と抵抗に遭っていました。それによって彼の心はすりへっていきました。そしてその度に主が彼のそばに立ってくださいました。彼にとって、最も暗かったのは、エルサレムにおける救いの証しであろうと思われまふ。彼はパリサイ人であつて、そこから回心したのだから、同じパリサイ人に対して証しをするという熱情を持っていました。ところがエルサレムに行き、文字通り命の危険を顧みず、主イエスに出会つたことを語つたら、そして異邦人に遣わすというイエスの言葉に触れたら、ものすごい騒動が起こつて、彼はローマの千人隊長によって引きだされて、そこから牢獄にいる身となつたのです。その夜、主がそばに立っておられました。「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ。(使徒 23:11)」パウロの伝道は失敗ではなかつたのだ、同じようにローマでも証しをなさい、と主イエスは励まされました。

ここに、神ご自身の義の右の手が、イスラエルの右の手を堅く握つて、それで支えて、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っている姿が書かれています。ここで大事なものは、この義は神ご自身にあるということです。彼らの義ではなく、神の義なのです。信仰によって、神から賜物として与えられるところの義です。だから、誰も彼らに言い争ふことはできません。神の恵みによる、神の選びの中に立つことは大事です。そして、自分の義ではなく、キリストにある神の義に立つことは大事です。その立ち位置は、皆さんをあらゆる悪霊による攻撃から守ります。

41:14 恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしはあなたを助ける。・・主の御告げ。・・あなたを贖う者はイスラエルの聖なる者。41:15 見よ。わたしはあなたを鋭い、新しいもろ刃の打穀機とする。あなたは、山々を踏みつけて粉々に碎く。丘をもみがらのようにする。41:16 あなたがそれをあおぐと、風が運び去り、暴風がそれをまき散らす。あなたは主によって喜び、イスラエルの聖なる者によって誇る。

ものすごい対比ですね。ヤコブ、イスラエルの人々を主は「虫けら」と呼ばれています。容易に不

見付けられて、つぶされてしまうような存在です。そのか弱い存在が、何と山々を粉々に砕くような打穀機としてくださいます。つまり、この力は完全に彼らのものではなく、もっぱら神ご自身が彼らと共にられるからです。私たちはぜひ、この力を味わっていきたいです。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。(1コリント 1:25)」神は強い者たちを通してご自分の力を現わすのではなく、私たちの愚かさ、私たちの弱さを通して現わされる方です。その聖霊の力によって、私たちは喜び、聖なる方によって誇ります。

41:17 悩んでいる者や貧しい者が水を求めても水はなく、その舌は渇きで干からびるが、わたし、主は、彼らに答え、イスラエルの神は、彼らを見捨てない。41:18 わたしは、裸の丘に川を開き、平地に泉をわかせる。荒野を水のある沢とし、砂漠の地を水の源とする。41:19 わたしは荒野の中に杉や、アカシヤ、ミルトス、オリーブの木を植え、荒地にもみの木、すずかけ、桧も共に植える。41:20 主の手がこのことをし、イスラエルの聖なる者がこれを創造したことを、彼らが見て知り、心に留めて、共に悟るためである。

イスラエルは、虫けらのようにひ弱なだけでなく、悩んでおり、貧しい状態でした。自分たちの土地に帰還しても、そこをどのように開墾していけばよいのか、悩んだことでしょう。しかし、主は事欠いている者に潤いを付与してくださいます。その結果、あらゆる種類の木々を植えさせていただきます。これも、主の約束されたことです。イエス様は、聖書が言っているように、わたしを信じる者は、腹から生ける水がほとばしり出ると約束されました。聖霊の働きです。信じますでしょうか、そうすれば今、自分が干からびていると感じていても、主は勢いよく満たし、溢れ出てくださいます。

そして、これは文字通り成就します。イスラエルの土地、神の下さった土地は、主がイスラエルを顧みておられるかどうかのバロメーターです。今、イスラエルの土地は緑がたくさんあります。かつて、オスマン・トルコの時代は荒地と沼地であったところが、ここに書かれている木々が植えられています。彼らのほとんどがまだ、主なる神を信じていませんが、しかし恵みが先んじてこのことが起こっています。

3B 後に起ころうとする事 21-29

41:21 あなたがたの訴えを出せ、と主は仰せられる。あなたがたの証拠を持って来い、とヤコブの王は仰せられる。41:22 持って来て、後に起ころうとする事を告げよ。先にあった事は何であったのかを告げよ。そうすれば、われわれもそれに心を留め、また後の事どもを知ることができよう。または、来たるべき事をわたしたちに聞かせよ。41:23 後に起ころうとする事を告げよ。そうすれば、われわれは、あなたがたが神であることを知ろう。良いことでも、悪いことでもしてみよ。そうすれば、われわれは共に見て驚こう。41:24 見よ。あなたがたは無に等しい。あなたがたのわざはむなしい。あなたがたを選んだことは忌まわしい。

主は、前もって、初めから語るることについて、つまり預言の言葉について強調しておられます。神々と呼ばれているのに、なぜあなたがたは後の事を語ることはできないのか？と問い詰めてい

ます。したがって、主が敢えて、ご自分こそが神であることを証明するために、そのことが起こるはるか前に、これらのことが起こると預言者たちに語らせているのです。したがって、私たちは預言を強調します。聖書にある預言を強調します。過去に起こったことだけを見るのではなく、今、そして将来に起こると主が語られたことを語り告げます。このことが、神々と呼ばれている異教と私たちの信じる神との決定的な違いを示すものだからです。

41:25 わたしが北から人を起こすと、彼は来て、日の出る所から、わたしの名を呼ぶ。彼は長官たちをしっくいのように踏む。陶器師が粘土を踏みつけるように。41:26 だれか、初めから告げて、われわれにこのことを知るようにさせただろうか。だれか、あらかじめ、われわれに「それは正しい。」と言うようにさせただろうか。告げた者はひとりもなく、聞かせた者はひとりもなく、あなたがたの言うことを聞いた者もだれひとり、いなかった。41:27 わたしが、最初にシオンに、「見よ。これを見よ。」と言い、わたしが、エルサレムに、良い知らせを伝える者と与えよう。41:28 わたしが見回しても、だれもいない。彼らの中には、わたしが尋ねても返事のできる助言者もいない。41:29 見よ。彼らはみな、偽りを言い、彼らのなす事はむなしい。彼らの鑄た像は風のように形もない。

主は繰り返して、クロスが来ることを語られます。「北から人を起こす」と言われていますが、イスラエルにとって、東にあるペルシヤであっても、アラビア砂漠よりも上、ユーフラテス川の上流から南下してこないイスラエルにはやってくることはできません。広大な砂漠の地を横断することはできないからです。ですから、次に「日の出る所から」と言って、東からの王であることを言っておられます。さらに、「わたしの名を呼ぶ」と言われています。歴代誌第二の最後、またエズラ記の最初に、クロス王が何と、ヤハウエの名を呼んでいる記録が載っているのです。「2歴代 36:23 ペルシヤの王クロスは言う。『天の神、主は、地のすべての王国を私に賜わった。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てることを私にゆだねられた。あなたがた、すべて主の民に属する者はだれでも、その神、主がその者とともにおられるように。その者は上って行くようにせよ。』」そして、このクロスのすることを予め、初めにシオンから語るようにさせると言われています。現に、イザヤがエルサレムからクロス王の到来の良き知らせを伝えていました。

3A 主の喜ばれる僕 42

このようにして、偶像礼拝に対して「それらは空しい」と強く言われましたが、救いはイスラエルだけに限られたものではありません。42 章では、国々に対しても救いをもたらす方が来られることを語られます。

1B 国々への公義 1-9

42:1 見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。

主なる神がここで呼ばれている「わたしのささえるわたしのしもべ」とは、誰のことでしょうか？先に、「わたしのしもべ、イスラエルよ。(41:8)」とありましたが、イスラエルのことなのでしょう。42

章を読み進めると、そうではなく、18 節以降で、盲目になってしまっている「わたしのしもべ」が出てきます。18 節以降が、イスラエルの民です。では、ここに出てくる「わたしのしもべ」は、イスラエルのメシヤのことで、イエス・キリストのことで、それは 2-3 節を読めば、福音書でイエス様の活動に引用されているので、明らかです。

イエス様は、イスラエルの代表として、イスラエルの理想として、神の僕とられました。イスラエルが神に選ばれて、神に支えられて生きるように、この方は父なる神に支えられ、選ばれ、この地上を歩まれました。主が水のバプテスマをヨハネから受けられた時に、聖霊が鳩のように降ってこの方の上に留まり、そして、天からの声がしました。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。(マタイ 3:16)」この言葉は、主イエスにあって成就しました。

42:2 彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。42:3 彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。42:4 彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立てる。鳥々も、そのおしえを待ち望む。

クロスを指し示している、日の出るところからの王は長官たちをしっくいのように踏む存在であります。しかし、主の選ばれたしもべは、対照的です。声を挙げず、ちまたでその声を聞かせず、いたんだ葦でさえ折ることはしない、弱き者に寄り添う姿です。力ではなく、まことによって公義をもたらされます。ある注解にはこう書いてあります。「それ以上折らないで放っておくとか、くすぶっているのを消しはしないが放っておくとかいうのではなく、いたんでいるものを立たせ、消えかけている燈心を新たに、炎をかつかと燃やす、積極的なことを言いたいわけです。(「聖書読解術」いのちのことば社)」興味深いですね、確かにその通りでしょう。この姿がイエス様の宣教の中に見出されます。マタイ 12 章でイザヤの預言が引用されて、そこでは主が多くの人を癒されているけれども、「ご自分のことを人々に知らせないようにすること、彼らを戒められた。(16 節)」とあります。

そして、この方は衰えず、くじけないで、それで地に公義を打ち立てるとあります。このようなやさしさと配慮、丹念に立たせていくことをするのは、忍耐を要します。容易に失敗します。しかし、あきらめません。この働きかけを私たちがイエス様から受けたからこそ、今の私たちがいますね。したがって、イスラエルを越えてここにあるように、鳥々にまで教えを待ち望むようになっているのです。こうして、神はすべて、鳥々までを造られて、彼らは偶像を拝んでいるかもしれないけれども、それでもまことの神を知ることができるように、ご自分の選ばれたしもべ、キリストを遣わされたということでもあります。

42:5 天を造り出し、これを引き延べ、地とその産物を押し広め、その上の民に息を与え、この上を歩む者に霊を授けた神なる主はこう仰せられる。42:6 「わたし、主は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。42:7 こうして、盲人の目を開き、囚人を牢獄から、やみの中に住む者を獄屋から連れ出す。42:8 わたしは主、これがわたしの名。わたしの栄光を他の者に、わたしの栄誉を刻んだ像どもに与えはしない。42:9 先の

事は、見よ、すでに起こった。新しい事を、わたしは告げよう。それが起こる前に、あなたがたに聞かせよう。」

主はご自身のことを、天地を創造された神としてだけでなく、人々に命を与え、また地上に産物を押し広める方、つまり人間の生きている源である方であることを宣言しておられます。そして、メシヤのことを改めて、呼ばれます。一つは、義をもって召され、その手を握り、また見守られること。これはイスラエルに対しても行なわれたことでした。もう一つは、イスラエルの民の契約となり、国々の光となるということです。イスラエルにとっての契約とは、イスラエルに新しい契約が約束されていましたが、イエス様が流された血によってそれが結ばれました。それから国々には光とあります。希望がなく、罪によって神から遠く離れているのが暗闇の状態です。国々に対して、キリストが光となりました。

そして、その暗闇の光としての働きとして、具体的に盲人の目を開ける、囚人を牢獄から連れ出す、また闇の中にいる者をその獄屋から連れ出すことです。イエス様はこれらのことを行われました。盲人の目を開かれました。そして、囚人については霊的に縛られている者たち、すなわち悪霊につかれている者たちから悪霊を追い出されました。さらに、闇の中にいるというのは、もしかしたら死んでしまった者たちのことを言っているかもしれません。ヤイロの娘、ナインのやもめの息子、またラザロは、死んでいたのに主はよみがえらせました。そして主は改めて、クロスについてそう言われたように、メシヤの働きについても、予め先に伝えることによって、確かにご自分こそが神であることを主張しておられます。

これらは、「新しい事」です。これまでにない、前例のないことです。私たちは必ず、過去の事例によって現在を見ます。このことも、以前、このようなことが起こったから、やはり今回もそのようになるだろう、と考えます。しかし、そのようなものが何も当てはまらない、新しい働きなのです。ベツスタで足なえだった男は、「よくなりたいか？」と聞かれたのに、「水がかき回されたとき、行けの中に私を入れてくれる人がいません。(ヨハネ 5:7)」と答えて、今までがそうだったからと答えて、過去を引っ張ってきました。しかし、主は、新しい事を行なわれたのです。私たちはある意味、主イエス様による新しい働きを受け入れていく者たちであります。

2B 敵の滅ぼし 10-17

42:10 主に向かって新しい歌を歌え、その栄誉を地の果てから。海に下る者、そこを渡るすべての者、島々とそこに住む者よ。42:11 荒野とその町々、ケダル人の住む村々よ。声をあげよ。セラに住む者は喜び歌え。山々の頂から声高らかに叫べ。42:12 主に栄光を帰し、島々にその栄誉を告げ知らせよ。

主によって、新しい事が行なわれるのであれば、そこから出てくるものは新しい歌です。私たちは40章では新しい力を得ると学びました。古いものは脱ぎ捨てて、新しいものを身につけるような力があります。同じように、古いものを引っ張ってきてそれで主に歌うのではなく、今、主が私の心

を動かして、それで歌っている歌であります。

そしてイエス様は、地の果てにまで公義を広めてくださるのですから、その歌も至るところで聞くことができます。その例としてあげている国々がすごいです。ケダルの人々から、声が上がっています。主はかつて、ケダルの者たちに対する裁きの宣言を行われました(21:16-17)。彼らは、自分たちで助け合い、強くあれと言いつついるような国々とあまり変わらない動きをしていました。しかし主は、あきらめておられません。ご自分のしもべ、キリストを遣わして下さり、そのような人々に対しても働きかけ、それでその中から主に立ち帰る人々が起こされることを願っているのです。セラの人々も同じです。そこはエドムの地です。エドムでは、神による永遠の裁きが定められていることが34章に書かれていました(6-7節)。ですから、主が裁きを行われると宣言したところに、かえって主は公義を打ち立てべくキリストを遣わされたのです。ゆえに、どんな暗闇にいても、主はそこから解放することを望まれていて、彼らには前例のない、新しいことを行われようとされているのです。ですから、私たちはあきらめてはいけません。自分自身に対しても、そして自分の周りの人たちに対しても、です。

42:13 主は勇士のようにいで立ち、戦士のように激しく奮い立ち、ときの声をあげて叫び、敵に向かって威力を現わす。42:14 わたしは久しく黙っていた。静かに自分を押えていた。今は、子を産む女のようにうめき、激しい息づかいであえぐ。42:15 わたしは山や丘を荒らし、そのすべての青草を枯らし、川をかわいた地とし、沢をからす。42:16 わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。42:17 彫像に抛り頼み、鑄像に、「あなたがたこそ、私たちの神々。」と言う者は、退けられて、恥を見る。

主が救いの御業を至るところに広められた後で、ここに書いてあるように敵に戦われるべく、戻って来られます。キリストの再臨です。そして敵に対しては戦われますが、盲目の者の目を開かせて、暗闇のところに光を与えられます。このようにして、見えなかった者に対して光を与えられます。そして、彼らがつまずかないようにしていただきます。

そして最後の17節には、偶像を礼拝する者に対しては退けられるという警告を行っておられます。ここが大事です、私たちには選択が与えられているのです。慰めを受けなさいと言われ、痛んだ葦を折ることもないで立たせてくださる、主の優しさの中に留まるのか？それとも、我を張って、自分がこうだと思っていることを頼りにしていくのか？主に頼るのか、それでもこれまでの自分に頼るのか、その選択があります。